

山下真央さん 米ユタ州で 貧困者住宅建設の 50日間

学生記者 谷ちひろ(法学部2年)

「やる気応援奨学金」は法学部のユニークな制度である。やる気に満ちて、山下真央さん(法・国際企業関係法学科2年)現3年は、米・ユタ州で貧困者用住宅建設のボランティアに参加した。ユタ州といえば、ソルトレークシテイ冬季五輪(02年)を思いだしたりすることし2月9日から3月30日まで、山下さんのユタ州50日間の体験と、得たものは――。

何かNGOを…

中学時代のホームステイ先で

日本を飛び出して何かをしてみたい。そんなときに思い出したのは6年前、市の派遣プログラムでお世話になった米国ユタ州に住むホストファミリーの存在だった。

「場所はもう決めていたんです。ホストファミリーのいるユタ州でやろうって」

福生三中3年のときに、ステファンソンさん宅に6日間ホームステイした。夫妻とはその後も年に何度か手紙やメール、Xマスカードの交換もつづけてきた。「もう一度会いたいってずっと思つて」と笑みが顔中に広がる。

金面、というところで山下さんが狙ったのは、「やる気応援奨学金」。法学部独自の奨学金制度である。

「やる気」の計画書作り

この奨学金制度は一般部門、長期海外研修部門、短期海外研修部門、海外語学研修部門の4つの部門からなり、給付額の上限は部門によって多少の

「それと……僕は2年から、FLP国際協力プログラムで開発について学んでいる。自分も貧困の解決のために何かNGO活動してみたかったんです。将来の選択肢の中にもNGOがあつて、ただ憧れているだけじゃなくて、実際に行動してみたかった。あと、まあ、せっかくアメリカに行くんだから、ただ語学学校に行つて勉強するんじゃないで日本ではできないことをしたかったんですよ」

インターネットで調べていくうちに貧困者への住宅支援をするNGO団体「Habitat for Humanity International」を見つけた。この団体は1976年に設立され、現在は70カ国に100万軒を超える住宅を提供している。ユタ州に建設中のコミュニティもそのうちのひとつ。――これで計画の大筋が決まった。次は資

差はあるが最高150万円。山下さんはこの中で海外語学研修部門の英語分野に応募した。しかも計画の大筋が決まったのは応募締切りの1週間前。そして書類選考を通過してから面接までの1カ月間で計画の細部を綿密に練った。アドバイザーとして丁寧な指導してくれたのは、「やる気——」の担当委員のヘッセ・ステューブン法学部教授。ドイツの文豪・ヘルマン・ヘッセの親類にあたるヘッセ先生の指導のもと、NGOのコンサルタントの人と連絡を取り、現地の交通手段も時刻表まで詳細に調べあげた。完成した企画書を手に挑んだ面接も無事通過し、上限ギリギリの29万円を獲得して計画資金のほとんどを賄うことができた。

建築現場体験と個性的なホストファミリー

ばらばらとテーブルの上に広げた写真の中から、いくつかの写真を取り上げては「これは……」と語り始める。やはり建築現場の写真が多く、資材を切っている姿や釘を打ち付けている姿、作業スタッフと並んで写っているのもあり、どれも楽しそう。

「最初は言葉の壁があったんですけどね、僕のほかはみんなアメリカ人で。年齢もバラバラだし、もともと大工をやっている定年退職した人とか、普通の会社員とかいろいろ」

作業は午前9時から午後3時まで。作業が終わるとスタッフの人々がすぐに帰ってしまうのは少し残念だったが、車で近くのバス停まで送っても

らったりと、人間関係もまずまず。

この建築現場とステイ先の家はけっこうな距離だったそう。毎朝6時にホストファミリーのブラッドさん(41)の運転する車で近くのバス停へ向かう。彼の仕事はカーペンターで、日本式に言えば「大工の棟梁」のような存在らしい。そんなボスがいつも山下さんの出発時刻に合わせて30分



早く家を出てくれたのだそう。そして現場まではバスを乗り継いでさらに約3時間。幸いにして天気には恵まれ、山下さんが帰国するときには2、3軒の家の外装が終わわり、あとは内装を残すのみと順調な作業ぶりだったようだ。

作業日は週に3日だったので、それ以外の日はホストファミリー、主にマザーのカレサステ

ファンソンさん(44)と一緒に過ごしていた(ちなみに、ふたりは事実婚の間柄らしい)。木曜日はいつもカレサの行きつけのジムに行き、あるときは彼女の職場に連れて行ってもらって子供たちに折り紙を教えたり新聞紙でカブトを折ったりもした。週末には一度ラスベガスにも連れて行ってもらった。もともと、その道中一番思い出深いのは、

カジノではなく、ファミリーと一緒にやったスノーモービルだったという。

「まあ初めてだったっていうのと、あと、誰も走っていない雪原を走る気持ちよさ(笑)」

ペンキを塗ったり、釘うちつけたり…

なるほど写真にも白銀の世界をバックにスノーモービルにまたがる山下さんの姿が。「なんでラスベガスが一番じゃないのかっていうと、僕の中で合わなかったんですよ。街が。……ギャンブル好きじゃないんです。だから、1回見とけばいいか、みたいな。ああ、こんなもんかって(笑)」

ホストファミリーのほうも山下さんをカジノに連れて行くことはせず、車から降りてラスベガスの町を軽く歩いただけだったそう。

日米ホームレス問答

また、こんなエピソードも。

「たまたまモールで会ったメキシカンと2時間くらい話したんですよ。貧困のこととか、ホームレスのこととか。その人は東京に来たことがあって、

日本人はホームレスに対して何をやってあげているんだ、と。そう言われた。ユタ州だったらモルモン教が、教会が彼らの面倒を見るんです。食事の世話とか。……で、日本人は何してるんだ、と」言葉に詰まった、という。自分は日本のホームレス事情について何も知らなかった。

「聞いたところによると、向こうのホームレスって家族単位なんですよ。日本のイメージは一人ですよ」

ホームレスの形態も、周囲の援助の仕方も異なる2つの国。そして何より「日本人は何してるんだ？」と聞かれて、答えられなかったこと。——戸惑うと同時に、悔しかった、と話した。

「タバはやめろよ」

「Don't say bye!」

2月末、20歳の誕生日を迎える前日。「もう10代じゃないんだな」と、ブラッドさんは山下さんにこう忠告したという。「絶対タバコだけはや



ホスト・ファミリーと。左が山下さん

めろよ」と。「そのくせタバコ吸ってるんですよ、彼は」と口をとがらせて語る山下さんの表情がおかしい。うまそうに「キャメルを吸いながら、「タバコ吸うとやめられなくなっちゃうから、絶対タバコはやめろよって、言うんですから」。いかにもおどかな「棟梁」ではある。

充実した毎日は時間の経つのも早い。

「やっぱり最初の1カ月は早かった。3月のアタマまではすっごい早くてね。けど、そこからはちよつと長かったですよ。残り1週間くらいは帰国までのカウントダウンを始めてました(笑)」帰国間際、ホストファミリーの言葉が忘れられない。ブラッドさんは山下さんをハグしながら、言った。

「お前も同じ太陽を見ているんだから、遠く離れていても思い出せよ」

マザーのカレサさんは笑顔をたたえてアドバイスした。

「Bye って言うけど、あなたは“Don't say bye!”。“See you”(また会おう) って言うのよ」

帰国の日がやってきた。空港での別れのとき。

「ちよつと今回、堪えたんですよ。前回は大泣きしてしまったので、泣かずに僕は堪えたんですけど……」

マザーは涙しちやって……と、場面を思い浮かべるように、すこししんみりした口調になった。

自問「NGOは自分向きか？」

今回の経験を経て、山下さんの中で変化したものがあ

「NGOは、今回で『ダメだ』と分かった」

ドキッとするほどはつきりと言う。が、表情は穏やかだ。

「NGOは合うか合わないか、と考えたときに、自分の将来の選択肢としてはダメだなと感じました。むしろ国際社会でのNGOの重要な役割を否定するわけではないですが」と続けた。

今回、山下さんは完全に無償ボランティアだったが、他の作業員は一応賃金を受け取っていた。とは言っても大した額ではないのでそれだけを職業とすることはできず、ほとんどの人が正規の職業を別々保持していた。それらを考えると職業としてのNGOの選択肢は山下さんの中から消えたものの、進路は依然として国際協力の分野を向いている。むしろこの経験で得た貴重な経験と自分への自信が、これから先何度となく背中を押すことになるだろう。



法学部の「やる気応援奨学金」は01年に新設。語学留学(アメリカ、カナダ、イギリス、中国、ドイツ、フランス、他)だけにとどまらず、これまでチーズ工場体験やアメリカの法律事務所でのインターンシップ、インドの孤児院のボランティア、カンボジア・ワークキャンプ、と法学部生が多様でユニークな「国際雄飛」を展開している。